

1 東大教養学部の履修システム

「進振り」「必修」「総合科目」「A 系列」「優 3 割規定」…。この先 100 ページ以上にも渡る本冊子において、冒頭に挙げたような「駒場独特」のキーワードが幾度となく登場する。ここでは、“瀕死の”リベラルアーツを請け負う東大駒場 2 年間の教育システム（主として履修システムや専門課程への進学）をざっくりと眺めながら、同時にそのシステムの中で学習生活を組み立てる学生の実感と実態にも触れてみたいと思う。

ここで参考にするのは『履修の手引き』なる A4 版 100 ページ程度の冊子である。この冊子は、東大に入学する 4 月頭の登校日のガイダンスで配布され、駒場の 2 年間を通して授業の履修において学生が知っておくべき事項や「進学振り分け制度」に関する詳細な説明が記されている。

ガイダンスは入学したての希望にうち満ちた学生がひしめき合う大教室で行われ、冊子の説明以外にも諸事に多くの時間拘束されうんざりした、という記憶が筆者の中に残っている（実際は周囲をキョロキョロしてあらぬ想像を巡らしていたのだが）。そのようであるからこの手引きがどんな言葉を添えて配布されたかはよく覚えていないのだが、「とにかく大切だからよく読み込め」とは言われた記憶がある。そう、実はこの手引き、「読むべきは教科書より履修の手引き」という驚きの言い伝えがある程、東大での学生生活にとっては重要なものなのである。

まず手始めに、教養学部長小島憲道先生による「はじめに」を引用しつつ、“メニューを広げるお店”側のモチベーションを検討してみたい。

東京大学における修業年限は 4 年間で、うち始めの 2 年間は、全ての学生が駒場の教養学部（文科一類から理科三類）に籍を置いて学修する。これを「前期課程」という。また、後の 2 年間は法学部や医学部といった専門課程に籍を置いて学修し、これを「後期課程」という。さらに、前期から後期へ進学する際、学生が前期どの科類に所属しようとする便宜的には希望した科類へ進学できるという仕組みを持ち、これを「進学振り分け制度」（通称「進振り」）という。このような仕組みを持つ大学は、日本の総合大学には他に例がない¹。このことについて小島先生は次のように記す。（『履修の手引き』p.1）

豊富に提供されている科目を履修する中で、自分の適正や将来設計をよく考えた上で後期課程（専門課程）を選択し、進学していくことになります。

（中略）

東京大学に入学された皆さんには、まず、バランスのとれた教養を幅広く身につけ、自分が将来さらに究めていくべき学問や、社会の中での自分の生き方についての判断力を養っていただきたいと強く期待しています。

¹ この話に関しては冊子後半の資料を参照されたい。

(中略)

東京大学の特色である「進学振り分け制度」とは、後期課程（専門課程）での進学先を3学期（2年生）の時点で決める仕組みです。この進学振り分け制度も2008年度の進学振り分けから新しくなり、全ての学部にとどの科類からでも進学できる可能性を含めて一層柔軟な仕組みに改善されました。

すなわち、入学時に学部・学科を決定してしまう他の大学とは異なり、東大は前期2年間の幅広い教養教育を用意して、己の志す道に限らず社会全体への大きな視野を育むと共に、自己の志望をもう一度見つめ直して、ある程度の自由度を保障した進路選択を許容しているのだ。

筆者の手元にあるデータを参照すると、平成20年度の新入生全員を対象としたアンケートの「東大に入学した理由」という設問において、実に全体の47.55%もの学生が「入学後の新路線の幅が広いから」を挙げている（『2008 東京大学入学記念アルバム』p.95）。

実際、筆者も「ただか18のガキに人生決められるはずはない！」とあって、この進学振り分け制度に魅せられて入学したクチだ。

同アンケートでは「教養学部前期課程のカリキュラムに期待しているか」という問いに対して86.4%の学生が「期待している」と回答し、「進学振り分けにおける全科類枠²についてどう思うか」で全体の76.34%の学生が「望ましい」と回答している（同書p.96）。

学生は、この前期の幅広い教養教育と自由な進学振り分け制度に大きな期待を抱いて京王井の頭線駒場東大前駅に下り立つのである。

では、その前期課程の実態はいかなるものなのだろうか。『履修の手引き』のコンテンツは大きく以下に示す7つにわかれている。

- I 教養学部前期課程での学修
- II 各科目の履修について
- III 履修の手続きと成績の評価
- IV 試験に不合格となった場合、または欠席した場合
- V 第3, 4学期に開講される各学部専門科目
- VI 教職科目
- VII 進学振り分け

以下、この順序で解説を進めようと思うが、IV, V, VIは論旨や大筋から少し逸れるので割愛し、I, II, III, VIIについて、適宜注釈や学生の捉え方なども差し挟んで語ることにする。この内容を大雑把にでも把握することで、アンケートでの学生の声を理解する助けとなれば幸いである。

² 後述。要するに、すべての学生がどの学部にも進学できる可能性がある。

I 教養学部前期課程での学修

1 科類

前にも少し触れたが、東大は他の大学と異なり、入学時に学部・学科の決定を課さない。では、全学生が一律の括りで入学してくるかという、それも間違いで、以下の6分類のいずれかを選んで受験・入学することになる。大学が提示する科類毎の特徴は以下の通りである。

文科一類 法と政治を中心にして社会科学全般の基礎を学び、関連する人文科学と自然科学の諸分野に渡って理解を深め、人間と社会について広い見識を養う。

文科二類 経済を中心にして社会科学全般の基礎を学び、関連する社会科学と自然科学の諸分野に渡って理解を深め、人間と組織について広い見識を養う。

文科三類 言語、思想、歴史を中心にして人文科学全般の基礎を学び、関連する社会科学と自然科学の諸分野に渡って理解を深め、人間と文化的・社会的営為について広い見識を養う。

理科一類 数学、物理、化学を中心にして数理科学、物質科学、生命科学の基礎を学び、自然の基本法則に関する探求心を養い、化学や技術と社会の関わりについても理解を深める。

理科二類 生物、化学、物理学を中心にして生命科学、物質科学、数理科学の基礎を学び、自然の諸法則に関する探求心を養い、科学や技術と社会の関わりについても理解を深める。

理科三類 生物学、化学、物理学を中心にして生命科学、物質科学、数理科学の基礎を学び、人間についての探求心を養い、生命と社会の関わりについても理解を深める。

似たような解説が並ぶが、数点の言葉の入れ替えによって科類間には雲泥の差が生じている。学生の実感から科類の特徴を捉えると以下ようになる（ちなみに呼称も学生風に略記にしてある）。

文一 文系の中では入るのが一番難しく、みんなあまり勞せず法学部に進学する。

文二 「猫文二」³と言われるほど暇で（現状は変化しつつある⁴）、多くが経済学部へ進学する。

文三 他より簡単に入ったは良いが、軒並み定員割れの文学部以外へ行こうと思うと厳しい競争に晒される。特に後期教養学部への進学は一つのステータス。

理一 千人を超える大所帯集団。主に理学部や工学部へ進学。多いだけあって競争は厳しい。

理二 主に農学部や薬学部へ進学。医学部への道も他よりはある。

理三 言わずと知れた日本最難関。進学振り分けでは、比較的得点が低くともほとんどの学生が医学部医学科に進学できる。

競争云々に関しては IV 進学振り分けのところで詳しく触れる。ここで覚えていて欲しいのは、「入試で大まかな進路分けが為されており、入試の問題は同じだが科類間で採点

³ 駒場キャンパスには野良猫が多く住みつく。この言い回しは、あまり授業に出ない（出なくても進路に差し障りがない）文二生を指して『猫の方が多く見かける』と揶揄したものである。

⁴ 経済学部の需要が「数学のできる理系」へと移り始め、それに気づいている文二生はしっかり勉強している。

基準や受験生のレベルは異なってくる」ということである。決して全学生が平等な進路選択権を持つのではなく、入試で入った科類によって行きやすい学部・行きにくい学部が存在するのだ。この件についても IV で詳しく言及したい。

2 科目と単位

前期課程で解説されている科目は、「基礎科目」「総合科目」「主題科目」の3種類に分類され、学生は「各科類の履修プログラム」の規定のもと、文系は合計70単位、理系は76単位を取得しなければならない。

前期課程の2年間は半年毎4学期に分かれており、各学期は、「1学期」「2学期」（ここまで1年）、「3学期」「4学期」（ここまで2年）と呼ばれる。

大体の科目で1週間に1コマ90分の授業が展開され、科目ごとの認定基準（試験やレポートや出席）をクリアすると1科目につき2単位が与えられる。故に、例えば文系であれば2年間の内に35コマ（ $= 70 \text{ 単位} \div 2$ ）の授業を履修すれば良いわけで、それはつまり一個学期に約9コマ（ $\div 35 \text{ コマ} \div 4 \text{ 学期}$ ）を履修すれば間に合うという話になり、「東大もかなり楽勝ではないか」とお思いかも知れないが、そんなに単純な話ではないことは、先ほどの「履修プログラム」の定めるところを見れば瞭然である。科類や学期によって差は（大きく）あるようだが、例えば文三のWさんは以下のような履修の仕方をしている。

1学期 17コマ / 2学期 15コマ / 3学期 10コマ / 4学期 19コマ : 合計 61コマ

大幅に多いと思うだろう。いくら東大生勉強熱心だからといって何もこんなに、と。もちろん、自分の興味で授業を選んではいいるのだが、実は私たちもとりたくてこんなに多く履修しているわけではなく、とらざるを得ない理由がそこにはあるのだ。

蛇足ではあるが、『手引き』（p.8）にはこんな記述がある。

1コマの授業を履修するためには講義・演習の場合は週4時間、実験・実習の場合は週1時間の自宅学習が必要とされている。

これを忠実に遂行している学生を、筆者は未だ知らない。

3 科目の概要

基礎科目

前期課程において最低限身につけておくべき基本的な知識・技能などを習得するためのもの。文系は「外国語」「情報」「身体運動健康科学実習」「基礎演習」「方法基礎」（以上、必修⁵）、「社会科学」「人文科学」（残りは準必修⁶）。理系は「外国語」「情報」「身体運動健康科学実習」「基礎実験」「数理科学」「物質科学」「生命科学」（以上、必修）が課されている。

5 必ず単位を取得しなければならない科目であり、落としてしまうと留年の可能性もある。

6 必修に準ずる科目で、ある程度の幅の中から定められた数の科目履修が必要。科類によってその数は異なる。

総合科目

現在において共有すべき知の基本的枠組みを多様且つ最先端な角度・観点から習得するための科目。下記の6系統がある。

- A 思想・芸術 D 人間・環境
- B 国際・地域 E 物質・生命
- C 社会・制度 F 数理・情報

文系・理系ともに16単位の取得が必要なのだが、文系は理系分野(D, E, F)へ、理系は文系分野(A, B, C)への越境的な履修が必要条件として課されている。

主題科目

文系理系ともに2単位以上の取得が必要。以下大きく3種類のタイプがある。

テーマ講義 領域横断的な教員リレー式の講義。

全学自由研究ゼミナール 教員各自が関心に応じて主題を設定し少人数で行うゼミ。

全学体験ゼミナール 教員が学生に体験を通じて学ぶ機会を提供する授業。

以上、「基礎科目」「総合科目」「主題科目」の3つに分類された科目から東大生の時間割は構成される。必修のほとんどは教務課が時間・教官をクラス毎に割り振る形で与えられるため、学生は必修のない空き時間に自己の裁量で総合科目・主題科目を入れて時間割を構成していくのである。

II 各科目の履修について

ここでは各科目の履修について、Iで見た科目3分類からさらに詳しく各教科ごとの履修の方法や必要単位数が記されている。冗長にはなってしまうが、アンケートを読むのに必要な知識であるため資料として要約する。

1 基礎科目

既習外国語（主として英語）

学生は受験の際に第1, 第2外国語を選択する。組み合わせは「既習+初習」もしくは「既習+既習」とされているため、ほぼ全ての学生が「英語+初習」を選択する。故に英語に関しては超大人数の授業となってしまう、公平化を図るため現在進行形で様々な模索が為されている。驚くべきことに(少なくとも筆者は驚いた)、3学期になるとどの科類でも英語は1コマに、4学期になると0になってしまう。

1年次の英語は「英語一列」(通称:英I)と「英語二列」(英II)に分かれる(文三のみ3つ目があるがここでは割愛)。

英語一列では、視聴覚設備を利用した一斉授業で足並みを揃える努力が為されている。内容も文理越境の多様なもので、東大教授が専門の分野を英語で解説している読み物教材

を使用している。ビデオ教材など様々な工夫が見られるのだが、普通に精読すれば面白い教材も、予備校のような解説授業を挟めば抵抗を感じる学生も多く、なにより、マークシートを利用した期末試験はセンター試験を喚起させ、反感の的である。

英語二列では、比較的少人数での授業が展開される。1, 2 学期には R (Reading, 読解基礎) と P (Presentation, ライティング・発表・討論) を、3 学期には C (Comprehension, 聴解・読解) を履修する。なお、2008 年度より、理系の P は特別プログラム ALESS (Active Learning of English for Science Students) により実施されている。これは、理科系の学生に早い段階から英語で科学論文を書く経験を積ませる、という目的のもとに始められたもので、学生は、簡単にでき、しかも多くの“数字を生む”ような実験を各自で考えて行い、得られた結果を解釈したり、データの有意性を議論したり、さらにはその実験の“科学に対する貢献”まで主張したりすることが求められ、最終的には一編の論文擬き⁷を作成して提出することになる。このように、どう見ても理科系の教員が担当した方が良さそうな内容であるが、英語系の教員組織だけで運営されている感拭えない。また、純粋な語法的誤りの範疇を外れた科学的事項を、いかにも科学に明るくなさそうなネイティブ教員⁸に指導されることの意味は、全く問題にされないようである。結局のところ、「英語を学びたい」という理科生の意欲は、毎週のように出される課題の対処に追われる中で少なからずすり減らされることになる。

7 小島教養学部長も言う通り、“英文報告書”の域を出ない。

8 ALESS プログラムの開始にあわせ、ネイティブスピーカーの“特任”教員が大量に雇用されている。

初習外国語（通称：2 外）

第二外国語と呼ばれ、ドイツ語（ドイツ語）、フランス語（フラ語）、中国語（チャイ語）、ロシア語（ロシ語）、スペイン語（スペ語）、韓国朝鮮語（コリ語）、イタリア語（イタ語・文科三類のみ）が開講されており、受験時に選択する。学生の生活基盤となるクラスも基本は語学毎の組み分けである。文系は一列・二列・演習の3種類、理系は一列・二列の2種類が開講される⁹。「フラ語とる馬鹿、チャイ語落とす馬鹿」とはよく言ったものである。

9 分かれてはいるが、同じ教員が担当することもある。

情報

全科類の必修で、1 学期のみ 1 コマ開講される。共通の教科書を使った授業で、主に情報教育棟というコンピュータ設備の整った建物で行われる。コンセプトは、実用的なパソコンの使い方かと思いきや、シラバスの言葉を借りれば

情報の技術面だけでなく、その人間のおよび社会的な側面の正しい理解が必要である。これは情報社会人の基本的素養であり、(中略) 本科目の目的は、このような素養を、講義と演習とを通じて身につけることである。

とされている。「やるのならば実用をやって欲しかった」という不満は多々あり、授業も眼前にネット環境があるためか、逃避行するシーンも見慣れたもの。

身体運動・健康科学実習（通称：スポ^{しん}身）

全科類の必修で 2 単位必修。但し、これに限っては 1 コマの履修につき 1 単位である。この科目は高校の「体育」を想像してもらえばよい。スポーツをしつつ、学期 3 回程度

の健康科学実習（人工呼吸法や筋肉細胞の観察など）が行われる。基本的には欠席やレポート未提出さえなければ「優」の成績（後述）がつく。

基礎演習・方法基礎

基礎演習は文系のみ、方法基礎は文三のみ開講される。前者は、人文社会の諸領域の基本的なトピックを扱い、資料収集や調査方法、口頭発表、論文作成の能力を養う。が、クラスごと割り当てられる教官で内容や“重さ”に若干のズレは生じる。1学期の1コマ必修の科目である。

後者は、文三の2学期で2コマの必修である。「哲学演習」「資料論」「データ分析」「テキスト分析」から重複可で2つを履修する。

人文科学・社会科学

文系の準必修科目である。ある程度の幅の中から科類毎に決められたコマ数以上の履修が必要である。

社会系では「法」「政治」「経済」「数学」「社会」が開講され、文一、文二は5コマ以上、文三は2コマ以上の履修が必要である。尚、文一は法か政治から2コマが必要で、文二は経済か数学から2コマが必要である。

人文系では「哲学」「倫理」「歴史」「言葉と文学」「心理」が開講され、2コマ以上の履修が必要。

基本的に900番教室や13号館など大教室・大人数での授業が多く、出席もとらないため、熱心に聴講する学生から、教官の顔がわからない学生までピンキリである。

数理科学

いわゆる「数学」を指していると考えてよく、自然科学的要素はない。1年生で履修するのは「数学Ⅰ」「数学Ⅱ」の2つがあり、前者で微積分の基礎、後者で線形代数学の基礎を学修することになっている。しかし、教員によって扱う内容の量・順序にかなりのばらつきがある。講義はほとんどの場合、教員が黒板に「定義」「定理」「証明」「系」などを順々に板書していき、学生は黙々とそれをノートに写す、というスタイルであり、「教科書の内容を書写する」と言った方が適切かもしれない。教員が途中で説明を挟むことがあったとしても、学生にしてみれば、講義中に深く考える時間的余地はほぼない。扱う量に比して講義の時間が短すぎると見るか、学生側の予習が足りていないと見るかは人それぞれであるが、いずれにしても忙しい時間である。

また、数学Ⅰ・数学Ⅱの講義とは別に、「数学Ⅰ演習」「数学Ⅱ演習」の時間が隔週で設けられている。

第3学期の科目は総合科目のF系列（後述）で開講され、「数理科学」と名を変え、学生が任意に選択できる。具体的には、「数理科学Ⅰ」～「数理科学Ⅴ」がある。

生命科学

理科生の必修授業で、分子生物学の基礎を学ぶ。特に理二・理三では、「生命科学Ⅰ」「生命科学Ⅱ」をそれぞれ1、2学期に履修することになっている。なお、理科一類で生命科学が必修化された背景には、大学入試（センター試験・2次試験）において「理科」の科目選択（「物理」「化学」「生物」「地学」のうちから2科目を選択）に際して、「物理」と「化学」の組み合わせを選択する学生が圧倒的に多いという事実がある。入試の出題内容から見ると、「物理」や「化学」では数式の利用が主であり、自然現象の定性的理解が直接問われることが少ないのに対し、「生物」は実験的要素・記述式の解答が多くなっている。

物質科学

理一は「力学」「熱力学」あるいは「化学熱力学（Bコース）」（以上1学期）、「電磁気学」「構造化学」（以上2学期）、「物性化学」（3学期）、また理二・理三は「力学」「化学熱力学」（以上1学期）、「電磁気学」「構造化学」（以上2学期）、「物性化学」（3学期）が必修科目に指定されている。このほか、2学期に総合科目E系列（後述）で「振動・波動論」（クラス指定¹⁰）が開講される。

必ずしも教科書どおりの内容・順序に講義が進むわけではなく、教員によってある程度内容の取捨選択もなされる。式演算などにおいて結果をいち早く求めるために、数学の世界では決して許されないような独特の“割り切り”や“テクニク”が次々と披露され、学生はその洗礼を受けることになる。

基礎実験

理一は「基礎物理学実験」「基礎化学実験」、理科二・理三は「基礎物理学・化学実験」（理一の2つの実験をそれぞれ半分ずつ行う）、「基礎生命科学実験」がそれぞれ必修とされ、2・3学期は週1回の割合で午後を実験棟（6号館）で過ごすことになる。

以下では、例として「基礎物理学実験」について述べる。

実験室には予め装置が準備されており、学生は1つの学期に12種類の異なる実験を、指定された部屋で、教科書に書かれた手順に沿って行う。教科書の内容は実験装置や手順に関しては至れり尽くせりであるが、やるべき実験の量も多く、実験時間中に熟考する時間はあまりない¹¹。

各自の「実験ノート」に測定値・グラフ・考察などをすべて記入し、最終的に別の部屋で、担当教員による「試問」を受ける。実験装置の工夫を問われたり、教科書のように“うまく”いかなかった場合はその理由を訊ねられたりする。試問が無事終了し、実験ノートに教員が印を捺したのちは、装置の後片付けなどをして実験終了となる。本来は3・4限の枠に入っている科目だが、実験の内容が盛りだくさんで、試問の担当教員が一人で多くの学生を抱えていることもあって、5限まで突入してしまう場合がほとんどである。つまり、色々な意味で“要領”がよくないと、手早く終わらせることはできない。例えば、教科書（計算にあたって使うべき“公式”などもすべて教科書に記されている。）や付属のDVDの説明を頭に入れておかなければ、非常に手間取ってしまうことになる。

10 総合科目の枠で行われる授業（すなわち任意選択）ではあるが、多くの学生が履修することを想定し、クラスごとに講義の曜限・教室・担当教員が予め割り振られているもの。学生が「皆が取るから」という安易な理由で選択し、そのまま必修科目の“やらされる”感覚を引きずってしまうのを助長しているという側面がないわけではない。なお、過去のカリキュラム改定で、それまで総合科目のクラス指定で開講されていた科目が“必修化”された例がいくつかある。

11 それも「予習のうち」ということだろうか

成績は実験開始とともにとられる出席と、学期末に提出する「実験ノート」によってなされる。他人の実験ノートやデータを利用するなどの「不正行為」を犯した学生に対する処分は、年々厳しくなっているようである。

2 総合科目

幅広い分野の学問にバランスよく触れることを掲げる東大の教養教育において、その役割の多くを担っている。総合科目はIIで挙げた6系列から、以下の指示に従って8コマ16単位の履修が必要である。

文系 A～Cまでの2系列以上に渡り4コマ、D～Fまでの2系列以上に渡り4コマ

理系 A～Dまでの2系列以上に渡り4コマ、E・Fの2系列に渡り4コマ

文理の違いはD系列の扱いである。Dでは主に「人間」「環境」に関する授業が開講されており、環境問題や倫理、情報といった内容を扱う。これが文系にとっては「まだ文系でも歯が立つ」内容、理系にとっても「まだ理系でも歯が立つ」内容であるので、文系がD、E、Fの“理系単位”を、理系がA、B、C、Dの“文系単位”をそれぞれ取得するために履修が集中する傾向がある。

3 主題科目

2単位以上の履修が必要。成績は点数化せず、合格・不合格のいずれか。内容的にも拘束時間的にも重いものが多く、テーマ講義の聴講で済ませるか、2年になって時間ができたところでゼミに入り活動するかということである。が、立花ゼミのように他の何を投げ出しても学生生活の全てを注ぐに値するものもあり（少なくとも筆者はそう考えている）、本冊子編纂に関わる学生のように熱い思い入れをもって望む学生も少ないとは言えない。

以上が各科目の大体の説明である。学生は以上の履修の決まりや内容をふまえ履修登録を行い自分だけの時間割をつくる。学生の自主性次第で科類や文理を越境した学修が可能で、大きな可能性を秘めたシステムであることは確かである。

蛇足かも知れないが、ここで『^{ぎゃくひょうてい}逆評定』^{たい}「シケプリ」^{たい}「シケ対」等、学生による制度への“抵抗”について触れておきたい。

まず『逆評定』であるが、これは東京大学のサークルのひとつ、時代錯誤社が発刊する冊子であり、同サークルの言葉を借りれば「教養学部1、2年生に対し授業を行っている教員を学生のアンケートによって評価しようというもの」である。主に単位の取りやすさや得点の期待度が主眼であり、それによって教員は「^{おおほけ}大仏」「^{ほとけ}仏」「^{おに}鬼」「^{おおおに}大鬼」の4等に分類される。学生はシラバスとこの逆評定（もはや逆評定のみか？）を片手に履修科目を検討するのである。それほどに学生は単位と点数に固執している。しかし、学生の名誉のために言うと、今回学生に向けて行ったアンケートの回答（次章に掲載）で「学生が単位と点数に固執している」という旨の指摘は多くなされており、学生が「わかってはいるの

だけれど、そうする他ない」という苦境に立たされていることが読み取れる。

これまで述べてきたようなシステムのもとで、学生側も効率よく勉強し単位点数を取得する術を発達させてきた。それが「シケ対」「シケプリ」なるものである。東大には高校と同じようにクラス制度が存在し、必修科目等の授業はクラス単位で受講することになっている。またクラスの友人と相談して履修科目登録をする場合が多いため、大概の授業はクラスメイトの複数人が受講しているという状況になる。この状況を利用し、クラス毎に非公式に決められた「試験対策委員長（通称：シケ長）」がクラスメイトの1人ないし2人につき1科目を割り振り、期末試験に向けての対策委員に任命する。これを「試験対策委員（通称：シケ対）」といい、シケ対は担当する授業に欠かさず出席してノートをとり、「試験対策プリント（通称：シケプリ）」を作成する。シケプリには、授業の要点まとめや予想問題・過去問などが掲載され、最小限の勉強時間で単位を取れるような出来が要求される。ごくまれに「これを見て勉強すれば必ず優^{かみ}がとれる」というような「神プリ」も存在するが、シケプリの出来はシケ対によってまちまちであり、クラス毎に成績差が激しくなることがしばしばある。シケプリはWeb上でやりとりされ、各クラスで非公式に設置されたページにログインするためのIDとパスワードを交換して多くのシケプリを入手し、良いものを選んで利用することも多い。いずれにせよ、このシケ対制度があるために、それに依存して必修以外の授業に出席しないという態度が見られるのも事実である¹²。

12このような制度がいつから始まったかは定かでない。

なお、教養学部も、数年前から、各学期末に「授業評価アンケート」なるものを実施している。これは、教養学部のほぼすべての講義ごとに、すべての履修者に対して、講義に対する率直な感想¹³を尋ねる大々的な調査である。

13科目の難易度、教え方の巧拙、教員の熱意、週当たりの学生の自習時間など。学生が自由に意見を記述する欄も設けられている。

厳密に言えば、回答者の母集団は「学期の終わりの方の特定の日の講義に出席した学生」ということになり、授業への不満が高いあまり出席を辞めてしまった学生の声は学部へ届きにくい仕組みになっている。これは、紙に回答する形式であることの弱点であろう。UTask-Web（後述）にはアンケート機能があるにも関わらず、不定期・任意回答のものがわずかに実施されるのみで、十分に活用されているとはいえない。この調査のために使用される紙の量¹⁴（及び経費）が膨大なものになることは容易に想像できるのだが、金よりも柔軟性が必要であるということあまり理解されていないのだろうか。

14簡単に言えば、サンプル数は（講義数）×（学生数）ということになる。

III 履修の手続きと成績の評価

学生は教科の履修にあたり「^{ユータスク}UTask-Web」とよばれるオンラインシステムを利用して科目登録を行う。ワンクリックでシラバス（各授業の説明）を参照できる、非常に便利なシステムである。

駒場生にとって最大の関心事である成績評価について言及したい。

履修登録を行った授業に関しては何らかの成績評価が必ず行われる。主題科目は「合格」「不合格」の全か無かの法則をとるので点数がつくことは無く、単位の有無のみが問題である。しかし、基礎科目と総合科目に関してはそう簡単ではない。

評価	原評価	判定
優	80-100	合格
良	65-79	
可	50-64	
不可	0-49	不合格

評価の方法は教官によってもマチマチであり、試験・レポート・出席のいずれかもしくは複数であり、授業での学修達成度が点数化される。

成績の評価は上記の基準により「優」「良」「可」「不可」の4等の評価で行われる。そして、『履修の手引き』には太字で記されているのだが、成績評価については「原則として優を受験者数の3割程度とする」という申し合わせがあり、これが学生を大いに苦しめる。この、通称「優3割規定」があるためにどんなことが起こるのだろうか。

例えば30人の授業で15人が90点を叩きだしたとする。この場合、原評価によるとその15人は文句無しの「優」をもらえるはずである。ところが優3割規定がある。15人全員に優をつければ教授会に“始末書”を提出しなければならない。教官は止む無く点数の上位10人に優、残り5人には良をつけることになる。すると悲劇はここからで、良をつけられた5人は原評価90点以上にも拘らず、進学振り分け用の平均点に加算される公式な点数は良評価の最高点である79点となってしまうのだ。

「別に科目の理解度の問題だから点数などどうでも良いではないか」とお思いかもしれない。しかし、駒場生の大半は「点数など」と言い放つことができない。

次節では、進学振り分け制度に言及する中で“点数・単位至上”という状況の根幹に触れてみたい。

IV 進学振り分け

この「履修の手引き」の最終章で遂に「進学振り分け制度」が登場する。といっても、制度そのもののがかなり複雑であり、この「履修の手引き」の他に2年次に配布される「進学振り分けの手引き」なる冊子が存在することからもその「重さ」は理解できるだろう。可能な限りわかりやすく説明していくつもりである。なお、筆者自身、文科三類という過酷な競争の世界に身を置いており、進学振り分け制度の影響を直に受ける立場にあるため、以下の解説に多少のバイアスがかかっている可能性も否めないが、これも一学生の実感として受け止めていただきたい。

前述の通り、駒場の1, 2年生は文一から理三までの6つの科類に分かれて籍を置いている。そのため入学した時点では後期課程でいずれの学部・学科に進学するかは決まっていない。第3学期の終了時点で、学生の志望と、それまでの学生の学修成績によって、学部・学科等の進学先ごとに定められた人数になるよう学生の進学先を内定させる手続きを、「進学振り分け」と呼ぶのである。東大を志望する高校生に多い考えに「志望の定まらない僕でも進振り制度があれば2年間はいろんなことを勉強して自分の進路を選択し、それから学部を決められる、なんていい制度なんだ！」というものがあり、あながち間違っているとも言えないのだが、そんなに甘いものでもない。

まず第一に進振りは、次に例を示すような、前期課程の科類と後期課程の学部の基本的

対応関係を前提として行われる。学部への進学の方法は2通りあるのだが、そのうちのひとつで、より基本的且つ確実なものがこの「指定科類枠」と呼ばれるものだ。

例 文一⇒法学部，文二⇒経済学部，文三⇒文学部・教育学部 など

つまり、例えば法学部にとっては文一が「指定科類」であり、具体的には定数415名のうち395名を文一から進学させる。では残り20名の枠はどうなっているのか。法学部の指定科類は理科や文二・文三からも若干数あり、理科6名、文二・文三2名分が確保されてはいるが、やはりいかにも少ない。法学部に進学するには、指定科類である文一に行くのが手堅いのである。

さらに残った12名はどうなるのか。これが指定科類枠以外のもうひとつの進学方法、「全科類枠」である。全科類枠は総ての科類に対して開かれた進学枠であり、2008年度より導入された仕組みである。この仕組みのよって学生は基本的対応関係にない科類からも多めに学部へ進学できるようになった。大胆な話で言えば、今年の進振りでのこの全科類枠を利用し文一から医学部へ進学した学生が存在した。

しかし、基本的対応関係がない科類からの進学は一定のハードルを伴い、進学先の学部が指定する「要求科目」を履修しておく必要がある。要求科目は特に理系学部によく設けられているため理転には骨を折る。例えば、医学部に全科類枠で進学しようと思ったら、理系必修の基礎科目である生命科学を届け出を出して受講しなければならない。そうすると、1年1学期から履修の組み方を一考しておかなくてはならない場合もあり、駒場の教養教育を受ける中で進路選択をするには無理が出てくる場合すらある。他にも、法学部の専門の授業は3学期から開始され、この授業は進振りの要求科目ではないため、必ずしも履修しなければならないわけではないのだが、受講していない場合、3年になってから再度駒場に通い、本郷での専門の授業と平行して受講しなければならない。これらが曲者であり、“進路選択のモラトリアム”としての駒場時代という印象はだいぶ薄くなる。

さらに、点数という問題がある。学生全員が各自の志望した学部に行ければいいのだが、生憎、定員というものが存在するわけで、志望が集中した学部には必然的に競争が生じる。ここで学生を選別する際に用いられるのは、試験でも面接でもなく、それまでの“学修成績”，すなわち1～3学期の履修科目の平均得点のみである。その意味で駒場の学生に対して“高校4年生”という揶揄があるが、言い得て妙である。人気の学部へ進学するために試験勉強に狂奔する姿は、大学受験の悪夢を彷彿とさせる。

点数の計算に関してはやや面倒な方法がとられる。普通、平均点と言えば「全科目の合計得点÷科目数」ではじき出されるのだが、進振り分けの場合はそう簡単ではない。これも近年変更のあったシステムだが、以前は総合科目を規定単位数の16コマ以上履修した場合、平均点に使用する得点は得点の良い順に上から16番目までで、残りは数値に反映されていなかった。そのため、学生は最初多めに履修登録をしておき、点数が望めそうにない科目と判断するや出席をやめてしまう傾向にあった。得点に反映されないのであれば何も怖くはない。ところが、数年前に規則が改定され、履修した科目が16単位を超えると、成績順に16番目までの平均のみをとるのではなく、17番目以降からも比率0.1で成績に反映されるようになった。故に「学期末試験を受験しないまま0点を取ってしまってもいい」と言う考え方はできないのである。

このようにしてはじき出された点数を持ち点として進振りが行われる。反映されるのは3学期末までの成績である。学生は教務課に希望を提出し、夏休み中に成績をもとに振り

分けが行われ、学部・学科が内定してゆく。進振りに臨む学生が参考にできるのは、せいぜい学部学科毎の底点表くらいなものである。

進学振り分けは2段階で行われ、第1段階では定員の約7割が確定される。第1段階で第2段階で何が異なるかといえば、それは振り分けに利用する点数の計算方法である。

第1段階では素直に平均点数が多い順に指定科類枠・全科類枠ごとに予定数内定をだす。第1段階で内定しなかった学生は第2段階へ進み、全科類枠からは素直に点数順にとるのだが、指定科類枠からは「学部・学科で定めた特定の科目を重視した」点数によって進学者を選抜する。

『手引き』を引用すると、

リベラルアーツ教育の理念を生かしながらも、学生の適性にあった進学を可能にすること、学生の志望をなるべく生かそうとすること、一元的な評価尺度による序列化の弊害を少なくすること、一発勝負による投機性を少なくすることなどに配慮した

ということだ。リベラルアーツと専門両者における学生の成績を評価して進振りに反映しようということと共に、点取りゲームとしての要素を除こうという気概は何えるが、試行錯誤の余地はまだまだありそうだ。

そうして振分けが完了し、めでたく進学が内定¹⁵する。そこをクリアすれば、(後期教養学部生を除いて)いよいよ、“高校4年生”時代を過ごしてきた、時に「遊園地」とさえ形容される駒場キャンパスを卒業し、感慨とともに赤門をくぐり、かの安田講堂を仰ぎ見るわけである。

15 「内定」というのは4学期の必修授業を落としてしまう可能性を加味した表現である。

ここまで読めば、駒場の教養教育の実態をある程度把握していただけたと思う。検討の参考にして欲しい。

《必要最低取得単位数》

前期課程で各科類の学生が取得すべき必要最低単位数を以下に示す。

			文科一類	文科二類	文科三類	理科一類	理科二類	理科三類
基礎科目	外国語	既習外国語	10	10	12	10	10	10
		初習外国語	14	14	16	8	8	8
	情報		2	2	2	2	2	2
	身体運動・健康科学実習		2	2	2	2	2	2
	基礎演習		2	2	2	—	—	—
	社会科学		10 ^{*1}	10 ^{*2}	4 ^{*3}	—	—	—
	人文科学		4 ^{*3}	4 ^{*3}	4 ^{*3}	—	—	—
	方法基礎		—	—	4	—	—	—
	基礎実験		—	—	—	4	4	4
	数理科学		—	—	—	12	12	12
	物質科学		—	—	—	10	10	10
	生命科学		—	—	—	2	4	6
総合科目	A 思想・芸術		2 系列以上にわたり 8			2 系列以上にわたり 8		
	B 国際・地域							
	C 社会・制度							
	D 人間・環境		2 系列以上にわたり 8			2 系列以上にわたり 8		
	E 物質・生命							
	F 数理・情報							
主題科目	テーマ講義		2					
	全学自由研究ゼミナール							
	全学体験ゼミナール							
他に取得しなければならない単位数 ^{*4}			8	8	6	8	6	4
合計			70	70	70	76	76	76

^{*1} 「法Ⅰ, 法Ⅱ」4 ないし「政治Ⅰ, 政治Ⅱ」4 を含めて取得する必要がある。

^{*2} 「経済Ⅰ, 経済Ⅱ, 数学Ⅰ, 数学Ⅱ」の中から4 を含めて取得する必要がある。

^{*3} 2 分野にわたって取得する必要がある。

^{*4} 「基礎科目・総合科目・主題科目の必要最低単位数の他に取得しなければならない単位数」には、他科類の必修科目などの単位を含めることができる（理系学部の要求科目の単位を取得した文科生のみ）。社会科学・人文科学の各科類の最低単位数を超えて単位を取得した場合は、各4 単位まで含めることができる。